

～ 岩手県震災ボランティア体験報告会 ～

「土日だけ、個人ボランティアとして参加させていただいております。」

報告 山下友宏(やましたともひろ): 2011/11/6

【自己紹介】

1974年生まれ、秋田県にかほ市在住
長崎県島原市出身、1992年雲仙普賢岳噴火で大きな自然災害身近に体験
2004年7月、7.11新潟水害で災害ボランティアに初めて参加
2004年の中越地震、2007年の中越沖地震にて大きな地震の怖さを実感



本人写真

【ボランティアの動機】

雲仙普賢岳の災害の時に、全国から多くの支援がありました。
自分にできることは限られますが、身体を動かすことで、恩返しになるのではないかと思います。
5月連休に災害ボランティアとして、岩手県陸前高田市気仙町上長部地区の活動に参加させていただきました。
現地での光景、黙々と腐ったさんまの片づけをする多くのボランティア、遠くから見守る被災された方々が印象に残りました。
それから、時間を見つけては、可能な限り個人で参加しようと思いました。
現在、仕事が休みの土日を使って、遠野のボランティアセンター（遠野まごころネット）での活動を続けています。
新聞、テレビなどは復興に向けて前向きに歩み始めた人々が注目されますが、多くの人々は失くしたものの大きさに、立ち上がることすら大変な状況だということを再認識しました。
真の復興は何年も先になるかもしれませんが、それを望む人々の役に立ちたいという思いを忘れないようにしています。
『体験報告会をきっかけに、少しでも多くの方にボランティアとして参加してほしいと思っています。』

【GWからの活動を通して感じたこと】

陸前高田上長部地区でのさんま片づけ作業のとき、作業を手伝ってくださった、地元の老年の男性から津波のときの話を聞く機会がありました。最初は遠くから多くのボランティアがきてありがたいという話をして、明治三陸津波はどこまで到達して今回の津波はそれよりすごかったという話をしました。作業を休んでひたすら聞き入っていると、亡くなった息子さんの話をぼつりと話されました。その時に感じたその方の悲しみの深さは忘れられません。
7月頃まで屋外でのがれき撤去、住居の泥だしなどが活動の中心でした。（活動範囲：陸前高田市、大槌町、釜石市箱崎地区）
当時は被災された方の心情に配慮して、写真撮影は厳禁でした。（10月末でも屋外の活動は続けております。）
そのころは警察の方の捜索も続いており、ブルーシートに覆われた捜索隊の方へ手をあわせている地元の方の姿もありました。自分自身は、いろいろな活動の現場で、休憩時間などを使って、亡くなられた方へ黙祷することにしていました。
ボランティアの方に直接挨拶をされる被災者の方は少ないですが、いつも遠くからみられていて、緊張感がありました。その分、黙々と活動して汗を流している姿が、被災された方の心に届いているのでは、ということも感じました。

【カフェ活動などのソフト面でのボランティア活動を通して感じたこと】

遠野のボランティアでは、「足湯隊（*1）」の活動を始め、被災者に『よりそう』ことを念頭にソフト（*2）な支援活動を続けていました。「ふれあい隊（*3）」という、タッピングタッチ（*4）を行うことで、リラックスしていただくという活動に参加させていただく機会がありました。直接、被災された方とふれあい、話をする活動です。
支援者の心得（*5）として、「～してあげる」、「かわいそうに」、安易な「頑張って」という言葉は、かえってその方を傷つけてしまうということに認識し、「津波のことをこちらから聞かない」、「家族の話題をこちらから聞かない」、「仮設や自宅の話題をこちらからしない」ということに気がつかったの参加になります。気をつけていないと、つい話をしてしまいそうになります。
当時は、避難生活も長期化し、暑い避難所で仮設に当選した方と、まだ決まっていない方が混在した環境でした。それでも、タッピングタッチなどでリラックスしていただいたり、こちらが傾聴（*5）の姿勢でいると、津波の時の話や亡くなられた家族の話をしてくださることもあります。こちらも、その悲しみに押しつぶされるような、そういう体験です。
隊の活動では、被災者の方もボランティアの方もリラックスすることに重きを置き、おどろくほどにゆるやかな時間感覚でした。
仮設住宅に移住が始まった8月から、カフェ活動（*6）を通して、仮設のコミュニティーづくりの支援に重心を移している時期でいろいろと試行錯誤がありました。（いままその途上です。）
集会場のカギが土日にあかなかたり、仮設団地の自治会長さんも決まっておらず、ボランティアもほとんど訪れないところもあり、地道に一件一件回っていくということから始めています。
主に、大船渡市の仮設団地の訪問（大船渡市の復興のイベント含む）する活動、遠野市に避難された方を訪問する活動に参加しています。まだまだ始まったばかりで、これからも多くの方の支援が必要と感じています。

- *1 神戸のボランティアから続く、支援活動
- *2 がれき撤去など外での活動に対し、ソフトと呼んでいます
- *3, 4 タッピングタッチというケア手法を取り入れ、被災者のリラックスと心のケアを兼ねた活動をしています
- *5 傾聴と心得については、支援のための注意事項として周知されています

【ボランティアの心得として印象に残った言葉】

「～してやろう、やってあげよう」ではなく、謙虚に「～させていただく。」という気持ちで。
被災者によりそう精神で。あくまで被災地が自立するための応援団として。
情熱は伝染する。同じところ、同じ活動に参加したほうが、復興につながる。
復興の話の前に、まず復旧がなくてはすまない。
あわてない、あせらない、あきらめない(3つの"あ")
ボランティア活動を続けていれば、きっと「ありがとう」という言葉がかえってきます。
ボランティアも被災者と同じ(災害がなければ被災地での活動もない)。だからこそできることがある。

以上 ありがとうございます。

8月21日の集合写真

